

『古今和歌集』や『伊勢物語』、『源氏物語』などの王朝古典に対する注釈的理解が、中世以降の文学や芸能を生み出す知識基盤となっていたことが知られてから久しい。片桐洋一、伊藤正義といった先達によって見出された鉱脈は、その範囲を広げつつ穿鑿され、『和漢朗詠集』、『法華経』、『日本書紀』などの注釈的営みとその成果とが続々と発掘されていった。この大きな動きは、「注釈」という研究領域を中世文学研究のなかに形成するとともに、それを生み出す学問環境への関心から、漢学、密教、神道等々の、かつて知の紐帯としてあった領域の生み出した様々なテキストへの検討がそれに続いていったことは周知の事柄であろう。学問と知識、信仰と儀礼といった輪郭のやや曖昧なものへの理解は、それらを具現化したテキスト群の発掘と検討を通して深化してきたが、そうした領域の理解に「注釈」研究の果たした役割は計り知れない。

「人の心をたねとしてよろずのことの葉となる」というこの国の文学の枠組みを語り、また、必然的に、あわせてこの国の成り立ちをも語るテキストであった『古今和歌集』注釈とそれをめぐる学問的営為については、主として和歌文学の研究者が個々の資料の検討を行い、その記載内容と詞章との比較から能テキストの成立環境を考える形で芸能を対象とする研究者の検討が続いた。その後、多くの個別の事例が報告されるに至り、和歌注釈を含む、「注釈」は閉じたテキストではなく、様々な領域の言説形成に関わっていることが知られてきた。こうした注釈の性格は今までも具体的事例の報告を以て理解されてきたが、それぞれの領域における研究の深化にともない、他の領域の達成が見えにくくなっている部分もある。また、個々のテキスト間の関係性が、どのような社会的あるいは歴史の意味や機能を持しているのか？という根源的な問いかけについては、ようやくに見通しがつけられつつあるが、互いに連関する領域や資料も膨大で、依然として積み上げられた事例から個々に推測している段階にあるように思われる。こうした現状において、関連する諸領域の研究者が集い、それぞれの分野の視点と成果とを問い、それらを共有しつつ新たな方向性を求めて行くことは、この分野の進展に大きな成果をもたらささう。

本シンポジウムは、和歌文学会、説話文学会、仏教文学会の三つの学会の例会を合同する企画として起案され、相互の理解の進展も目論まれている。『古今和歌集』の注釈を主たる対象として、そこを起点として考えられる諸問題についてシンポジウムの個別の報告に、ディスカサントのコメントを加え、フロアを併せた活発な討議を期待したい。

譬喩と古今注 ― 為頭流・宗祇流 ―

石神秀美

「古今伝授」の語義を導入としよう。古今は古今集、伝授は、特に秘密仏教で形成された教育システムを緩く指す。初歩から、師資交座の中で最秘奥を教授するまで。階梯は相当な長期間に亘り、終には伝法灌頂の儀式に至りつく。だから古今伝授は、古今集とそれに纏わる多様な知識を、伝授の形式で伝える教育システム、と定義できよう。

古今集の講釈がいくどかある。整ったシステムでは最終盤、つまり「灌頂伝授」の際の全巻講釈は詳しくまた深く、筆録したノート＝聞書を、弟子は先生にチェックしてもらおう。加註を乞う。これに口伝を上乗せする。口伝は紙に書かれれば「別紙」「切紙」といわれ、薄い草子＝冊子の場合も。通常秘伝書などと呼んで、この授受の段階のみを「古今伝授」と称した論者もあった。特に注目したいのは「聞書」である。これを「注釈書」の一種とみることができる。秘伝書も注に加える。いわゆる「古今注」において、これらの分量は大きい。

洋の東西をとわず、中世は注釈書の時代だ、といえる。内容的には非常に深読みとしかいいようのない、強引なしかし面白い解釈も多い。創造的誤読といってもよい。新たに物語や神話を創るに等しいのだが、過去の古典に託ける、という形式で語り手の創造性発露の回路が形成されるわけである。

室町の前期、応永あたりを境として前期伝授期／後期伝授期と二区分する。前期を代表するのが鎌倉期の為頭流、後期を代表するのが室町期の宗祇流である。今回はこの二流派のそれぞれの「譬喩」解釈を例示する。現代人には同感できまいが、ここに、講者の思想内容がもつとも表れているともいえよう。

一、為頭流。聞書としては「毘沙門堂本古今和歌集注（仮称）」。「伊勢物語との同一視が甚だしく、作者未詳の歌を、伊勢登場人物に比定して解釈してゆこう、という指向が強い。伝書としては「玉伝深秘卷」「古今灌頂」など。大日如来が姿を変え、住吉の神一人丸一業平と化現、和歌・男女の道すなわち即身成仏の道、と説き、胎内五位を経て大日

如来が人となり、また歌となる、という。密教の一派の伝書を取り込んで和歌論に仕立て直している。

二、宗祇流。聞書に「古今和歌集両度聞書」「古聞」など。上記のような古注の観点は脱落、譬喩論は多く毛詩の次序により、教誡的・教訓的な内実。「下の心」を通常の歌解に続けて示すことが多い。切紙には天台教学を援用するものがあり、これらに五山禅林で講ぜられた学の木魂をきく。神仏に加えて顕著な儒の要素の混入が見られ、このような混淆思想によって、伝授体系・内容を再構成しようとした学派であったようだ。

『玉伝深秘巻』の宗教的基盤と神祇書への展開

應義塾大学付属研究所斯道文庫 高橋悠介

本発表では、まず古今注の為頭流の伝書の中でも、主に『玉伝深秘巻』について、そこにみえる宗教的な基盤を取り上げる。『玉伝深秘巻』については、片桐洋一氏・三輪正胤氏・石神秀美氏などにより基礎的な性格や諸本関係が整理され、近年では、日本古典偽書叢刊の第一巻に名古屋大学本を底本とした抄録が収められ、詳細な脚注が施されている。こうした諸研究をふまえつつ、特に森羅万象が仏体であり、その森羅万象を詠み顕すのが和歌であるという、『和歌古今灌頂巻』にも一部共通する理念などについて考えてみたい。諸本により異なる著しい伝書で全体的なことをいうのは難しいが、それでもこうした理念の文脈を考えるのは無駄ではないだろう。

また、古今注の展開、その裾野を見渡す上で、『神祇陰陽鈔』（書名は諸本により異なるが、仮に上記のように総称する）という神祇書に注目したい。本書には、『玉伝深秘巻』と同様の金札の話が引かれているが、『玉伝深秘巻』の金札伝は、かつて熊沢れい子氏が能「金札」の基盤として注目したもので、金札伝の流れの様相を考える上でも興味深い。加えて、『神祇陰陽鈔』には、「経信伝」「定家伝」に云く、などと称して神道説が述べられるという特色がある。こうした神祇書をみることで、為頭流に顕著な古今注が神道説・密教説を取り込んでいく面だけでなく、逆に古今注の影響を受け、和歌秘伝の形を取る神祇書が出てくる様相がみえてくる。

吉田神道と『古今和歌集』註釈一斑 — 『古今和歌集』註釈史と中世後期・近世前期学問史の一隅をめぐって —

国際日本文化研究センター共同研究員 野上潤一

中世後期、吉田兼俱によって大成された吉田神道と『古今和歌集』註釈・古今伝受の交渉については、和歌文学研究の立場から、三輪正胤氏「神道者流『八雲神詠伝』の成立」（『歌学秘伝の研究』風間書房、一九九四年、初出一九七九年）、同氏「神道者流『八雲神詠伝』の流伝」（『歌学秘伝の研究』初出一九七九年）、同氏「『八雲神詠伝』の成立、再説」（『歌学秘伝の研究』初出一九八五年）、海野圭介氏「吉田神道と古今伝受——『八雲神詠伝』の相伝を中心に——」（『中世神話と神祇・神道世界』竹林舎、二〇一一年）等が、主に、吉田兼俱による偽作と考えられる「藤原定家発給下部兼直宛誓紙」を権威の存立基盤とする秘伝書・『八雲神詠口決』と古今伝受（三条西実隆『古今伝受書』（永正七年二月十八日伝授）・『当流切紙』二十四通（三条西実枝授↓細川幽斎受）における『八雲神詠口決』享受、および、後陽成院・桜町院・冷泉為村への『八雲神詠口決』伝授）、ひいては、吉田家・吉田神道と古今伝受の関わりを検討していることは、周知の通りである。

一方、神道史研究においては、夙に西田長男氏「『八雲神詠口決』の成立——中世に於ける神道文学論の発生に就いて——」（『国語国文』八一―一九三八年一月）が、上記の問題に加え、中世から近世に亘って、『八雲神詠口決』をめぐる、思想上の展開について概説しているが、和歌文学研究においてはほぼ参照されておらず、研究領域を横断する研究の蓄積は成されていないことが知られる。

また、先行研究においては、①『八雲神詠口決』を除く、『日本書紀』註釈をはじめとした吉田神道関係典籍と、②『古今和歌集』註釈、および、三条西実流古今伝受・御所伝受を除く古今伝受関連資料の交渉に関して、③横断的に検討されていないため、本発表では、学問史研究の立場から、上記の問題を考究することによって、和歌文学研究と神道史研究に架橋することを目指しつつ、『古今和歌集』註釈史と中世後期・近世前期学問史の一隅を闡明することとする。具体的には、『古今和歌集』註釈・『八雲神詠口決』末書・古今伝受関連資料における吉田神道関係典籍利用等を検討することによって、吉田神道が、『古今和歌集』関連資料における支配的神道思想であること、『古今和歌集』関連資料が、ほぼ一方的に吉田神道に依存している（吉田家は介入していないと考えられる）こと、吉田神道が、古註的思想に理論的枠組を補完する、あたらしい知識・理論、および、権威として位置づけられること等、『古今和歌集』関連資料における吉田神道の位置づけを再考したい。